

フランス・マルクス主義における欲求論

安 田 尚*

(平成元年10月31日)

要 旨

マルクス主義が現代社会を「豊かな社会」とする「消費社会論」や「富裕化論」を検討するうえで欲求論の確立は不可欠な課題と思われる。筆者はいわゆる「豊かさ」を相対的に評価する視点は、欲求論によってこそ確立し得ると考えている。こうした問題関心から、1970年代後半におけるフランス・マルクス主義の欲求論を検討する。彼らは現代資本主義を国家独占資本主義の危機段階にあるとしたうえで、人々の欲求は不充足の状態におかれているとする。欲求論のイデオロギー状況については、ブルジョアの欲求論は生産と消費を分離し、消費の第一義性を強調することによって、生産を手段化し商品を「自由」に選択し得る「抽象的主体」を設定し、更に差異主義者たちは消費を差異の表現手段とすることによって、「消費社会」像を完成させたとしている。フランス・マルクス主義の欲求論は、生産の視点から、欲求を「労働力再生産を構造化する社会的実践という客観的規定の主体的形態」と概念規定し、新しい欲求を「補填の」欲求と「資本の廃棄」の欲求として詳細に論じている。その欲求論は生産の視点から欲求を二重の全体的規定において捉えている点では高く評価できる。しかし、欲求を主体的契機から分析する点では不十分と思われる。

KEY WORDS

société de consommation 消費社会

production 生産

besoin 欲求

différenciation 差異化

rapports symboliques 象徴関係

reproduction 再生産

1. はじめに

マルクス主義は、いまだかつてない危機に瀕していると言われている。その一つの原因は資本主義体制における、戦争と貧困の減少に一事実の認識としては全く皮相にすぎることがあるという。戦争と貧困こそマルクス主義がその本領を發揮して来た問題であり、その原因を資本主義体制の矛盾にもとめることがその理論的正当性と説得力を保持し得た源泉なのである。したがって、戦争と貧困の根絶・解決としての社会主義こそ希求さるべき理想社会とされたのであった。ところが今や戦争や貧困はすくなくとも表面的には資本主義体制が引き起こす現象ではないかのごとき様相を呈し、むしろ社会主義こそが何らかの戦争（中ソ、カンボジア、アフガ

* 社会系教育講座

ン)にかかわり、「貧困」(農業不振, 物不足, 軍事経済の歪み)にまとわりつかれており, その結果マルクス主義はその理論的・実践的活力を失ったというわけである。とりわけ日本資本主義の場合, 「貧困」の問題は「経済大国日本」の出現によって未曾有の「ゆたかな消費社会」の到来をむかえることによって消滅し, 「富裕化論」の流行を見るに至ったのである⁽¹⁾。したがって今や「窮乏化論」は時代遅れなのであり, しかも富裕化論自体も, 言わば富裕化のハード論(衣食住, 耐久消費財の確保)から富裕化のソフト論(あり余る財とサービスの利用技術の開発, より美的な生活様式の探求, 時間や文化の消費)にその関心を移行させているかのようである⁽²⁾。この点, 戦争の問題はおくとして, 「富裕化論」提唱の一人である経済学者馬場宏二は, マルクス経済学のパラダイム危機として論じている。すなわち, 資本主義におけるスタグフレーションの出現によって近代経済学の危機がさげばれていたまさにその時, 「その裏で[マルクス経済学]自らのパラダイムの崩壊と言っているような事態がすでに進行していた。私は次の三つの論点で日本のマルクス経済学にとってのパラダイムの崩壊が進行したと考えています。それは窮乏化論と社会主義優越論と日本後進国論, この三つがいずれも成立しないような事態に立ち至ったということです」(傍点は, 引用者による。以下とくに断わらない限り同様)⁽³⁾。つまり, 馬場に言わせると, 日本においては窮乏化も後進国的「みじめさ」も問題とはならず, 「もはや富裕化の事実はおおいがたい」のであり, 「強大な生産力」が「大衆の富裕化社会」をつくり出してしまったのである⁽⁴⁾。にもかかわらず, 従来マルクス経済学では「生産力視点が弱く富裕化論が出てこない」のであり, 自らの提唱する富裕化論によってこの「強大な生産力」の成立根拠をみきわめようというのである。そして, まさにこれに答えるかのごとく高原朝美は『富裕化と貧困化の論理』⁽⁵⁾において, 従来貧困化論の一面性と限界を指摘しつつマルクス主義的な富裕化論の必要性を説くのである。しかし, その論理は残念ながら, その努力にもかかわらず「貧困化」と「富裕化」を対置したままであり, 両者の関連のもつ意味を把握し得ていない。とは言え, 通俗的な富裕化論がもっぱら消費の視点から資本主義の生み出す「膨大な商品集聚(マルクス『資本論』)」に目を奪われているのに対して, あくまで「社会的生産力の構造」⁽⁶⁾に視点を据えている点は評価されるべきである。だが, 高原が「社会的生産力が, ……個々の人間諸力に発達作用と歪曲・破壊作用を及ぼす」⁽⁷⁾と言い, それは社会的生産力の「正負両面の作用」⁽⁸⁾なのだという形で「富裕化」と「貧困化」を対置するとき, その弱点は明らかとなる。これでは, アダム・スミスの「よく統治された社会では, 人民の最下層にまで広く富裕がゆきわたるが, そうした富裕をひきおこすのは, 分業の結果として生じる, さまざまな技術による生産物の巨大な増加にほかならない」⁽⁹⁾つまり, 「階級的搾取……にもかかわらず, 労働者たちでさえ富裕化する」⁽¹⁰⁾という論法を容認することになる。即ち「搾取」と「富裕化」の二面的把握から抜け出せていないのである。事実上, 高原は搾取にもかかわらず, 富裕化は進むという「生産力主義」の術中にはまっているのである。というのは, 結論部分で高原は「[享受的「私民」化]という価値観を内面化した諸個人であるがゆえに, 私生活の快適を生活原理として消費を享樂し, そのことが労働生産性を飛躍的に向上させ」⁽¹¹⁾していると述べているからである。つまり, 「[享受的「私」民化]」=「労働力商品化」=「搾取」される存在であるがゆえに, 「労働生産性を飛躍的に向上」させねばならないのであり, 「富裕化」をもたらすとしているのである。つまるところ, それは「貧困化」と「富裕化」の共存であり, 「搾取」と「富裕化」の堂々巡り, あるいはまたその螺旋的展開に陥っているのである。その意味で, マルクス主義にとってこのアダム・スミスの論理は存外手強い相手なのである。筆者はこれに対して, 資本

主義的「富裕化」と「貧困化」の二面的把握を越えるには、こうした現象を相対化する視点が必要だと考えている。そうした視点の確立なしには、こうした「生産力主義」を脱する事は出来ないのである。今あらためて、マルクス主義が「富裕化」を相対化する視点を求めて「ゆたかさとは何か」⁽¹²⁾を問題にせざるをえないことがその事情を物語っている。筆者の観点からすれば、「富裕化」や「豊かさ」を相対的に評価する視点はまさに欲求論にあると思われる。「豊かさを問う」とは、人間が何を求めているのか、何を求め得るのか、また何を必要としているのか、またそれは何ゆえにを問う事であり、人間の欲求にたいしての「豊かさ」なのであり、それは取りも直さず欲求の問題なのである。その意味で欲求論はマルクス主義にとって避けて通れない課題なのである。

本稿は、こうした問題意識に導かれながら、1960年代後半から70年代後半にかけてフランス・マルクス主義が試みた欲求論の成果を検討しようとするものである。そこで、以下検討する文献についてその概観を示しておきたい。まず第一に取り上げたいのは、E. プレトセイユらの『欲求と生産様式—危機における資本主義から社会主義へ—』（パリ、1977年）である⁽¹³⁾。本書は1960年代後半から『パンセ』誌などで論じられたマルクス主義による欲求論をその後集団的に討議した結論によるものであり、フランス・マルクス主義における欲求論の総括と言ってよい文献である。① J-P. テライユ「商品の物神化と欲求の観念論」、② 同、「欲求の歴史的・社会的本質」③ E. プレトセイユ「社会的欲求と国家独占資本主義」、④ M. ドゥカイヨ「社会主義と欲求」の四本の論文から構成されており、マルクス主義の立場に立つ社会学者（前二者）と経済学者によって欲求の問題が包括的に論じられている。第二としては、経済学者 P. グルヴェによる『人民の欲求と公的財政』（パリ、1976年）があり、経済学とりわけ財政学から「なぜ、教育、健康、住宅、社会保障はその規模の大小はあるにせよ、公的あるいはそれに類する財源によって賄われるのか。なぜ、この領域においては人民の欲求は深い不充足におかれるのか」を問題にしている。第一部「資本主義における人民の欲求」では、「資本主義的生産における生きた労働の役割を特徴づける諸矛盾とこの諸矛盾によって推進される階級闘争が、個人的消費の公的財源の主要な源泉を形成している」という「中心的仮説」に基づき、マルクス理論における欲求と消費について一般的に論じている。さらに、第二部「資本主義における個人的消費の公的財源の最初の形態」と第三部「生活維持の資本主義的システムの危機の表現(1920-1945)」では、前述の仮説をフランスの資本主義形成期から1945年までの歴史的歩みの中で実証している⁽¹⁴⁾。そして、第三には①『パンセ』誌の「欲求と消費」特集号（No. 180. 1975年）の八本の論文と②『エコノミー・エ・ポリティーク』誌の「購買力、生活水準、欲求」特集号の四本の論文があげられる⁽¹⁵⁾。以上の文献を素材としつつ、①欲求論と現代資本主義、②欲求論をめぐるイデオロギー状況、③欲求論の基本問題の三つに整理して、その成果を検討したい。

2. 欲求論と現代資本主義

彼らは、現代資本主義をどのように捉えているのであろうか。うえの四つの文献に共通しているのは、現代フランス社会および先進資本主義国を国家独占資本主義の体制としたうえで、現在はその危機の段階にあり、人々の欲求は不充足の状態に置かれているとするものである。いわゆる「全般的危機論」にもとづいた国独資危機論であり、その際欲求の不充足は体制変革

の戦略的契機として位置付けられているのである。『欲求と生産様式』において、この点つぎのように述べられている。「戦後の国独資の上昇局面は、資本の急速な蓄積、大量生産の発展、一連の新しい消費財の普及、加速化する都市化に伴う生活様式の変化によって特徴づけられる。」こうした局面では、「資本主義は組織化の拡大と国家の介入によってその危機を決定的に遠ざけ、本質的矛盾を征服したかのようである。それは、物的財貨の増大する豊かさを伴った『産業社会』の樂園へ向かう凱旋行進の様相を呈したのである⁽¹⁶⁾。こうして、「消費社会」や「豊かな社会」の理論が出現したのであり、階級協調の基本命題、つまり一般の利益のサービスのための永続的な国家の介入と分け前となるパイの増大が広汎な支持を獲得するに至ったのである。ところが、「一九六〇年代末の景気の逆転、国独資の危機局面への突入は、そのイデオロギー体系の些か野蛮な再編成を必要とさせた。」つまり、「[[経済]成長とその消費を通じての幸福の提供者たる資本主義から、ゼロ成長による生活の質の推進者への転換」である⁽¹⁷⁾。経済成長の礼賛者からゼロ成長の説教者への変わり身の早い転換であった。この言わば節欲のイデオロギーにたいして左からの援軍が現れる。すなわち、「1968年5月の『より少く消費して、よりよく生きる』という異議申し立ての提唱者たち」である⁽¹⁸⁾。こうして国独資の危機を契機に経済成長からゼロないし低成長への路線転換は、左右相呼応した「愛の生活と新鮮な空気」⁽¹⁹⁾つまり節欲のイデオロギーを唱導するに至るのであるが、これは「社会的に不可欠な欲求の不充足」を隠蔽するものでしかないのである。人々の社会的欲求の充足をもとめる理論や運動を「生産主義」と攻撃する修正主義者の理論も同様な役割を果たすものであるが、これに対して彼らはこの国独資のもたらす欲求不充足に抗する理論や運動を体制変革の契機として積極的に位置づける。この事情は上の文献の執筆者たち(M. ドゥカイヨ, P. グルヴェ, H. ノロー)も参加した著作『国家独占資本主義』において明らかにされている⁽²⁰⁾。彼らは国家独占資本主義を「資本と生産の社会化を促進する」資本主義の発展段階ととらえ、国家の「社会経済生活」への介入と科学技術革命がこの社会化を更に高めるとしている。その結果、生産力の増大と社会化、国際化が促されるのである⁽²¹⁾。こうして「国家独占資本主義をたんなる独占資本主義から区別する」のは、「社会経済生活への国家の干渉の一般化、技術進歩の加速化と科学技術革命の誕生、生産の国際化、インフレーション、一国的・国際的な貨幣恐慌、社会の諸階級・諸階層の賃労働者化と両極分解、階級闘争の拡大等」なのである⁽²²⁾。ところが、「国家独占資本主義の内在的諸条件が個別のおよび共同的な社会的諸欲求を増大させるとはいえ、国家独占資本主義は、生産をこれら諸欲求に適應させる能力のないことを証明している」のであり⁽²³⁾、これを克服するには「国際的な労働者階級と諸人民の諸欲求の充足の程度を国際的レベルでの生産諸力の社会化の増大に近づけるための、それらの連帯した闘い」を必要としている、というのである。つまり、国独資はその内在的条件によって個人的・共同的な社会的欲求の増大を促すにもかかわらず、生産をこの欲求の充足に適應させることができない点に彼らは、その矛盾を見いだしているのである⁽²⁴⁾。したがって、彼らにとって「社会的諸欲求の充足」の理論と運動は体制変革の戦略的契機として位置付けられているのである。その意味で社会主義は「社会的諸欲求の充足を中心にして運行し、まさにそのことから、生産諸力の発展を保証するもの」とされるのである⁽²⁵⁾。

3. 欲求論をめぐるイデオロギー状況

テライユは『欲求と生産様式』の第一論文「商品の物神化と欲求の観念論」において、非マルキシストの欲求論の寄与と限界を明らかにし、唯物論的アプローチの独自性を示そうとしている。彼の上げる非マルキシストの欲求論は、第一に、ブルジョア経済学（古典派経済学から近代経済学に至る）およびこれと相補の関係にある社会学に代表されるブルジョア・イデオロギーの欲求論と、第二に、これとは異なり一定のリアリティを反映した理論である (a) ヴェブレン、ゴプロに代表される差異の心理主義、(b) アルバックス、ブルデューの象徴関係としての消費論、(c) J. ボードリヤールの記号としての消費論という二つの潮流に大別される。まず第一の潮流について見ておこう。テライユは第一の潮流であるブルジョア・イデオロギーの欲求論の特質を生産と消費の分離と消費の第一義性の主張にあるとしている。これがロック以来のブルジョア的欲求論の特質、伝統であるという。つまり、ロックはその「幸福の経済学」を「欲求に依拠して」展開し、欲求を「人間の生存様式」、「人間的生存の第一の、そして最も自然な表現」とし、「人格と財産の個人的所有権」や「経済的自由主義」の「正当化」の根拠とするのである⁽²⁶⁾。その後、消費概念が古典派経済学とともに形成されることになる。すなわち、「自立的な特殊な実践としての消費の表象」は「資本の歴史的発展」の程度に応じて明確化されるのであるが、「消費者」が登場するのは18世紀の功利主義者コンディヤックの「『諸欲求』に恵まれた抽象的主体」においてである⁽²⁷⁾。さらに、それは19世紀の限界効用学派によって体系化され、ワルラスの定式では①「『効用』の充足の最大値を選択の自由から引き出し」、②「欲求のヒエラルヒーを経済学的体系に対応させる」ことになる。こうして資本主義では、「経済的活動は『至上の消費者 (consommateur souverain)』の欲望に奉仕することのみを目的に展開される。」⁽²⁸⁾。だが、こうしたブルジョア思想において消費の問題が成立、深化するのは「商品の消費」という「消費の特殊な様式の発生と展開」によるものなのである。つまり、原蓄段階における生産者からの生産手段と消費手段の分離によって、資本は生産と消費を分離するのである。前資本主義とは異なり、資本主義においては使用価値の生産や生存のための消費から生産が解放され、生産と消費は空間的、時間的、論理的に分離され、自立化される。こうして消費のブルジョア的論理の特質は「生産と消費を外在的なもの (extériorisations) として把握する」点にある⁽²⁹⁾。その結果、消費は第一の契機、決定的要素、自立的要素となり、これに対して生産は市場において必需品を供給する単なる手段となる。要するに、テライユはブルジョア的消費理論を①生産と消費の分離と②消費の第一義性に見いだそうというのである。この点では修正主義者 J. ボードリヤールの消費論も同様の前提に立っているとす。つまり、「①すべての消費の商品消費への隠然たる同一視、②消費財体系 (série) と個人の関係において、社会的欲求が充足され尽くすとする還元的理解、③生産過程を手段とする見方 (生産過程が階級対立の根源であることが黙殺される)」を前提としているのである⁽³⁰⁾。

見られたように、テライユがブルジョア的消費理論の特質として生産と消費の分離、消費の第一義性をとりわけ重視するのは、それによって、社会的欲求の充足が商品の消費にすり替えられてしまうこと、生産関係の隠蔽がもたらされること、つまりは「商品の物神化」に陥ることを明らかにしたいためなのである。したがって、ブルジョア経済学や俗流経済学が消費から生産に至るのに対して、唯物論的アプローチはあくまで生産から消費へと展開されねばならな

いとするのである。その意味で消費と欲求は「資本の総過程との関連で捉えねばならないのであり、消費と欲求の領域の自立化を避けねばならない」と言う⁽³¹⁾。しかし考えてみると、むしろ生産主義をその神髄とする、あるいはまた生産主義の権化であるはずのブルジョア経済学が消費の第一義性を主張するというのは、奇異な感じを受ける。だが、この点筆者流に敷衍して言えば、ブルジョア経済学はあくまで理論上は消費を優先させ生産を手段化することで、抽象的に自由な主体としての「消費者」を呼び出すことができるということなのだ。こうして、消費者の自由な選択に奉仕する生産という消費社会像を斯喞的につくり出すことができるのである。

第二の潮流である (a)「差異主義的消費論」や (b)「象徴関係的消費論」、(c)「記号の消費論」についてはその一定のリアリティを評価しつつその限界をも指摘するという扱いになっている。テライユによれば、欲求の実体論つまり欲求を人間の本能や生物的・有機的存在維持の機能とする見解を免れようとする社会学者は「差異主義派 (différencialiste)」によって代表される。端的に言えば、差異の表現手段としての消費という主張である。その主張によれば「欲求は、……もはやその本質上、個人と [社会] 構造の再生産ではなく、諸個人の象徴的な社会的記入 (insertion sociale)、つまり社会的地位、階級的帰属を表現する必要 (nécessité)」であり、「消費は差異の生産、ないしはせいぜいのところその再生産」ということになる⁽³²⁾。そして、(a)「差異主義的消費論」としてヴェブレンの『有閑階級の理論』(1899年)とゴブロの『障害と規準』(1925年)が検討される。この二人は社会学者に先駆けて「消費の誇示的性格や消費行動の差別的 (discriminatoire) 機能」を明らかにしている⁽³³⁾。ヴェブレンの場合、消費の動機は生活維持にあるのではなく、差異化の表現にあるという。つまり『消費を刺激するのが生計の手段や物理的安逸の欲求にあるのなら、産業の発展は少なからず集団的な経済的欲求を充足するとも考えられようが、実際は声望や比較の競争なのである。』消費の本質的な目的は、すべての社会的・歴史的規定を免れた「体系的な差異化 (la différenciation systématique)」であり、「『あらゆる時代における、富を獲得する最大の動機、それは羨望を呼び起こす卓越化 (distinction) にある』」とされる。その意味ではヴェブレンの場合も、第一の潮流である限界学派と同様に生産は消費に奉仕するものとされているのである。そして差異化の指標たる特別の消費対象として衣服と住居があげられるわけである。さらに、ゴブロの場合は差異化と共に、集団的優位性を示す手段としての同一化 (s'identifier) の機能が問題にされ、「平準化 (nivellement) は、卓越化 (distinction) の必要不可欠な補完物」とされる。その際、流行現象はこの矛盾を最も良く表現するものであり、「流行が広まるとき、それは変化しなければならないのである。流行は (流動的な) 障害であると同時に基準」ということになる。テライユは以上のように両者の理論を概括したうえで、①差異主義者は心理主義のある部分を脱却している点と②不十分ではあるが消費行動のあるリアルな面を把握し得ている点で評価できるとしている⁽³⁴⁾。しかし、これは上流階級の消費行動の特性を表現していても労働者階級の与かり知らぬ世界のことなのである。したがって、ヴェブレンによれば「大衆の消費は基本的には『順応の精神 (l'esprit de conformité)』に従うほかない」のである。だがいったい大衆は、何に順応するというのか。ヴェブレンが「生産にはまったく触れていないのだから、その隠然たる答えは有機的欲求の充足ということになる」のであって、差異主義者も究極的には「欲求の実体主義」に陥っているのだと、その限界が指摘される⁽³⁵⁾。

しかし、筆者に言わせれば、こうしたテライユの指摘はマルクス主義者としては当然のもの

と言えようが、昨今の「分衆」論や「階層消費」論を見るとき、この差異化の意識は「大衆消費社会」の上流階級のみならず広汎な人々の意識を捕えているかに見える。そこには商品の「多様化」=差異化が豊かさにすり替えられる危険が潜んでいるのであって、「大衆的富裕化社会」の「富裕化」なるものも実のところ、この差異化=「豊かさ」の罠に外ならないのではないか。差異化によって自己を表現しようとする性向は人間性のある一面であると思われるが、それがこの爛熟せる「大衆消費社会」によって搦め捕られていると言えよう。

さて続いて、テライユは (b) 「象徴関係の消費論」としてアルバックスとブルデューをとりあげる。この二人の研究成果は社会学の中では最も実り豊かな消費行動の研究に数え上げることが出来るものとした上で、アルバックスの大衆の消費行動に関する二つの研究、即ち①『労働者階級と生活水準』（1912年）と②『労働者階級における欲求の発展』（1933年）を検討する。周知のようにアルバックスは階級帰属（労働者、被雇用者、公務員）とそれぞれの家計構造の関連を分析することで、同一の所得水準でもその消費行動に違いのあることを明らかにしたのであった。つまり、①被雇用者は労働者よりも多く住宅に支出し、より少なく食事に支出するのであり、②公務員は被雇用者よりも多く衣服に支出するというのであった。したがって、家計構造を説明し得るのは「社会生活の条件」、すなわち家族的行動と階級実践の総体にあるという。アルバックスの場合、「欲求は『社会的感情 (sentiment social)』によって形成される」のであり、この「社会的感情」は家族と階級という二つの基準に方向づけられている⁽³⁶⁾。この主張は「家族が消費の単位であること、家族的行動を最終的に決定するのは階級であることを強調することによって、……欲求の実体主義からは免れている」とテライユは評価する。さらに、アルバックスは消費を支配する二つの論理を提起する。すなわち、①労働の論理=「労働が社会生活に課する条件と拘束」と②象徴的関係の論理=「諸階級における区別と同一化[自己確認]」である。言うまでもなく、後者は「差異主義的消費論」の継承である。テライユは前者の論理にアルバックスの主張の問題点を見いだす。つまり、「労働の論理は、生産の論理ではない」のである。アルバックスによれば「近代産業の労働者はその労働において物質 (matière) に対して孤立した状態で直面している」とされる。したがって、「社会階級は労働の形態と労働過程における地位によって規定され、象徴のイデオロギー的場面においてのみ関係をもつとされる」のである⁽³⁷⁾。だが、企業の場合は労働者階級の組合組織や政治組織の場であって、労働者は孤立した存在ではないとテライユはこれを批判する。つまり、アルバックスは生産関係について語らないがゆえに、階級の歴史理論や階級関係や社会的欲求の歴史理論をもち得ないというのである。さらに、ブルデューの場合は階級の「状況の特性 (propriétés de situation)」と「地位の特性 (propriétés de position)」を対置したうえで、後者が社会階級を規定するとしている。この点で言えばアルバックスは前者に力点を置くものだという。ブルデューによれば『それぞれの社会階級は、歴史的に規定された社会構造において地位を占め、社会構造の他の構造物との関係によって影響を受けているのであるから、その内在的特性からは相対的に独立した地位の特性でなければならない』というのである⁽³⁸⁾。ここで言う「内在的特性」とはあるタイプの職業実践や生活の物的条件のような、いわゆる「状況の特性」の事だという。ブルデューの場合、「地位における差異が『事実の多様性 (différences) を意味の卓越化 (distinction) に変質させる』体系的表出という象徴的領域」を問題にするのであり、「象徴体系が体系表出の形態を形成する」ことになるのである⁽³⁹⁾。だが意味的区別の素材となるものは極めて広いのであって、この「階級的地位の象徴」に含まれるのは、①意味を現す態度 (procédés)、②社会的

行為総体：社会的地位の翻訳，洩漏なのであって，この結果直接的に経済的目的に志向した行為は全く象徴的機能を失うことになるのである。だから，ブルデューの場合経済的費用では表すことの出来ない階級的地位の表出手段としての文化的消費と文化的実践が問題にされるのであり，動機の心理学ではその社会的機能を把握出来ないというのである。つまり，動機の心理学は「満足」や「理由 (raison)」の背後にある社会的機能を発見できず，「満足」や「理由」で自足しているというのである。したがって，ブルデューは「欲求の源泉を象徴の論理に移行させる」のであり，「消費行動と文化的実践は、『階級的エートス』（各階級に固有な規範と価値の体系）の観点で立てられる」ことになる⁽⁴⁰⁾。以上のようにブルデューの主張を概括したうえで，その限界が指摘される。その一つは「差異主義的消費論」の場合と同様に，象徴関係は大衆にとって与かり知らない世界の論理だという点である。もう一つは，「決定されたもの（象徴的關係）が決定するもの（生産関係）から独立して導かれ得ると公準化している」点である。つまり，「象徴的關係」の実質的な自立化を前提にしてしまっているというのである⁽⁴¹⁾。テライユに言わせれば，階級の状況と地位を規定しているのは生産関係なのであって，イデオロギーや象徴の領域の自立化は認められないというのである。したがって，最終的には次のような判定が下される。「[ブルデューの理論では] 階級闘争や生産関係は姿を消している。また，階級規定を問題とする場合もブルデューは，社会的職業的カテゴリー—経済的關係における位置 (place) と社会的職業的カテゴリーを混同して—や文化に依拠するのである。というのは，彼は『上流階級 (classes supérieures)』を『教養ある階級 (classes cultivées)』と理解しているのだから。』⁽⁴²⁾

だが，この批判は筆者に言わせればその基本的指摘は了解しようとしても，ある意味ですれ違いの批判である。ブルデューの場合，生産関係や階級闘争に還元しえない「文化」や「職業上の地位」が消費行動や文化的実践（象徴的關係）を方向づけ，意味を与える点を重視しているのである。仮に，階級や生産関係が変革されたとしても残存し，人々の実践を方向づけ，拘束するであろう構造に着目していると言えよう。あるいは生産関係といった広い視点からではなく，逆に射程を狭めることでかえって見えてくる実践の論理を精緻につかもうとしているのではないか。少なくとも，大状況の視点からは見えにくい実際の障害物を剔り出すことによつてリアルな解放の論理を提示しようとしていると思われる。

さらに，(c)「記号の消費論」に関する議論を見ておこう。その代表者であるボードリヤールを「最も極端な差異主義的アプローチ」とテライユは評している。その主張のポイントは，高度に発達した産業社会における消費は「対象をその物質性において消費するのではなく，その差異において消費する」のであり，「消費の対象となるのは，記号（階級的差異の）」であり，「『消費はそれが意味をもつのは，記号の体系的操作の活動においてなのである』」，という点にある⁽⁴³⁾。テライユによれば，これは社会の記述という面でリアルであり，差異主義者の議論の真理を確認するという点で一定貢献し得ると評価する。だが，この議論はヴェブレンやゴブロの「差異主義的消費論」以上には消費行動の意味を汲み尽くすものではない。この点を一步踏み出して一般理論に至ろうとするとき，つまりマルクス理論の改作を企てようとするとき我々はこれを拒否しなければならない，というのである。その理論上の難点はどこにあるのか。ボードリヤールの議論の鍵は「使用価値を商品生産の特殊社会的形態としている点」にあり，まさにこの点に彼のマルクス理解の誤りがあるのだ。彼は「使用価値と交換価値」，「signifié と signifiant」，「道具性の論理と等価物の論理」を「並置 (juxtaposer)」しているが，これはマルクスの主張とは異なったものである。マルクスにおいては交換価値（価値形態）は二つの商品

の関係であり、価値と使用価値の関係は「並置」ではなく「内的矛盾」なのである⁽⁴⁴⁾。結局、ボードリヤールはマルクスの価値論を理解し得ないがゆえに、「いかに物的生産と記号の生産を同じ論理が貫いていると言ったところで彼の主張は記号に対する『世界』の従属にすぎない」のであり、「現実の signifiant [記号] への還元、イデオロギーの記号への還元によって、[かえって] 記号の生産や論理を考察し得ないものとする」のである⁽⁴⁵⁾。したがって、ボードリヤールの問題にし得たのは「形態 (forme)」, すなわち「流通, 交換, 個人的消費」のような「表層の運動 (mouvement apparent)」にすぎず、それを規定し、形成し、再生産している「過程 (processus)」, すなわち「資本主義的生産の社会的過程」である「真の運動 (mouvement réel)」には至らないというのである⁽⁴⁶⁾。だから、彼はこの「形態」と「過程」の関係を明らかにし得ず、イデオロギーのイデオロギー批判をなし得ないのである。これに対して「価値形態の唯物論的批判はこの形態そのものの原因として商品の物神性の必然性を暴露」し、「真の運動(この形態を形成し、物神性を支えている)＝価値と使用価値の矛盾」によってこの形態を解明し得るとするのである⁽⁴⁷⁾。このボードリヤールのマルクスの誤読にもとづいた一般論に対するテライユの批判は、筆者も同意し得る点である。

ここで、第一の潮流との関係で以上の第二の潮流を位置付けるなら、第一の潮流であるブルジョア・イデオロギーの欲求論が生産と消費を分離し、生産の手段化を主張し、そこに商品を「自由」に選択し得る「抽象的主体」を設定するのに対して、この第二の潮流は差異化という「豊かさ」によってこれを補完することで「消費社会」像を完成させる関係にあると言えよう。(もちろん、この第二の潮流が消費における階級および階級間の不平等や消費行動に潜む微細なリアリティを反映したものであることは認めたいことであるが。)

4. 欲求論の基本問題

最後に、彼らが非マルキストの欲求論を批判したうえでポジティブに提起する欲求論を①欲求概念の規定、②その方法的視点、③欲求の発展論の三つに整理して検討しておこう。

まず第一に、欲求の概念規定について見ておこう。筆者の読み込みによれば、彼らは欲求概念を二重の全体性の視点から規定していると思われる。その第一は、人間の存在維持の根本的在り方からの規定、すなわち人間が自然と社会と関連を取り結ぶことでその生存を維持するという形態からの規定である。その第二は、資本主義においては、欲求は労働力再生産にとって必要 (exigences) なものの主観的形態であるとしたうえで、労働力の価値＝賃金による商品消費によっては、この労働力の再生産に必要な社会的欲求総体は充足し得ないとするものである。第一の人間存在にかかわる全体的欲求も第二の労働力の再生産としての欲求も共に資本主義が労働者に保証する労働力の価値＝賃金によってカバーされないと言う意味でそれを二重に相対化する視点である。筆者が本稿「1. はじめに」で強調した商品・貨幣的「富裕化」を相対化する視点に連なるものと言える。つまり、こうした欲求の全体的規定に立つてこそ、搾取と「富裕化」の二面的把握を克服しうるのである。商品・貨幣的「富裕化」を豊かさで見誤らないためにはこの欲求の全体的規定に依拠しなければならないのである。まず第一の全体的規定。テライユは『欲求と生産様式』の第二論文「欲求の歴史的・社会的本質」において、欲求を規定する場合本質的なものから出発しなければならないとして「人間の自然に対する関係」に着目

している⁽⁴⁸⁾。さらにグルヴェは『パンセ』の第五論文「欲求の主観的契機と客観的契機」において「人間対自然の物質代謝」の節で「消費関係は〔人間と〕自然との物的交換における人間関係の経済的な一側面に属する」と規定している⁽⁴⁹⁾。また、プレトセイユも「消費は人間による自然の領有の実際の状態と定義され得る。そこでは、人間は一定の対象を変化させ、破壊しつつ、自らを再生産する。いわば、消費の全状態は人間自身を再生産する具体的労働と生産の状態である」としている⁽⁵⁰⁾。このように欲求や消費の対自然・対社会関係という全体的規定を確保することで、第二の労働力再生産の全体的規定が導かれる。プレトセイユはこの点次のように指摘する。「資本が『その価値』を労働力に対して支払う際に考慮せざるを得ない欲求とは何か。……労働力の価値を規定するのは〔労働者の〕欲求それ自体ではない。……それは資本の観点からの再生産の欲求であり、資本主義的生産様式の再生産の欲求に外ならない。』⁽⁵¹⁾つまり、労働力の価値として資本が支払うものは労働者の再生産にとってただ必要な欲求(les seuls besoins nécessaires)を充足するだけであって、欲求それ自体の充足を可能とするものではないのだ。」こうした視点から経済学者グルヴェは「分離された(disjoins) 欲求」なる概念を引き出し、これを充当せざるを得ない故に「公的財政」による負担が必要となるとしている。つまり、「剰余価値生産のための最も①狭隘、②直接的、③単調、④部分的である必要性には『算入されない』欲求は『分離された』ものとして扱われ、賃金には算入されない」のであり、「利潤生産に対する直接的挿入から分離された〔除外された、排除された〕ものとして社会的に扱われる欲求」をグルヴェは「分離された欲求」と呼ぶのである⁽⁵²⁾。その根源は「資本による労働者という人格の労働力への還元」にあるのであり、その結果この「分離された欲求は」「賃金においては認知されないという構造的傾向が生み出される」のであり、それは「人民の欲求」と「労働力の商品的性格」の「一般的敵対性」であり、「分離された社会的欲求」と「接合された(joints) 社会的欲求」の「特殊的敵対性」へと展開されるのである⁽⁵³⁾。したがって、「人民の社会的欲求」のうち何が「賃金」即ち「接合された社会的欲求」に、あるいは「公的財政」に算入されるか、逆に言えば何が「分離された社会的欲求」として放置されるかを決定するのは、資本と労働力関係ということになる。その結果、資本主義においては「労働力の価値を構成するのは、社会的欲求の総体の価値ではない」、すなわち労働力の価値＝労働力再生産に必要な(nécessaire)生活手段の価値<社会的欲求総体の価値という関係が成り立つことになる⁽⁵⁴⁾。こうして住宅、教育、健康、子供の養育、老後保障、生活環境など労働者の基本的欲求の慢性的不充足が生じるのである。その原因は、①資本による購買力の制限(低賃金、インフレ、税政策などによる)と②労働力の価値にこれらの欲求を算入しない、つまり「分離された社会的欲求」として扱うことにあるというのだ。しかも、この賃金から「分離された欲求」の実現では、欲求の「意識の獲得」、したがって階級的、社会的な運動の要因が決定的なものとなるのである。要するに、こうした欲求の全体的規定の視点から見れば、資本主義の充足し得ている欲求はごく部分的、局部的なものにすぎないことになる。しかも、欲求の歴史的発展を考慮に入れるなら、それはなおさら一面的なものとして相対化されることになる。以上の含意を込めて彼らは「労働力再生産を構造化する社会的実践という客観的規定の主体的形態として、我々は欲求を定義することを提案したい」というのである⁽⁵⁵⁾。

さて第二に、彼らが共有する方法的視点について触れておこう。マルクス主義者としては全く当然の事ではあるが、彼らは欲求や消費の問題を生産の視点から、すなわち生産関係と生産力の矛盾的統一としての生産様式の視点から検討しなければならないとする。これは周知のマ

ルクス『経済学批判序説 (1857年)』における生産と消費の関係についての議論を拠り所とするものである。本稿「3. 欲求のイデオロギー状況」において触れたように生産と消費を分離したうえで、消費を個人の商品的消費に狭く限定するのではなく、消費を生産的消費と個人的消費を含む広い概念とし、さらに生産と消費の相互規定関係によって欲求の形成を解こうというのである。テライユはマルクスの上の文言に依拠しつつ次のように述べる。「消費が生産の社会的過程の契機として現れるなら、個人は『生産的個人である限りで、また自らを再生産する限りにおいて』、消費する」(傍点はテライユ)のであり、「したがって、消費の担い手は、[同時に] 生産の担い手なのであり、その欲求は彼らが占める位置 (place) から生じるのである。』⁽⁵⁶⁾そしてここで言う位置とは①物的生産力の作用する過程における役割と②生産の社会的関係における地位によって規定される位置のことであり、いわゆる生産関係のことである。プレトセイユもまた同様の視点から述べる。生産の視点を欠く観念論的欲求論は個人的消費の問題に欲求を一面化する故に、欲求の成立根拠や基本的な社会的規定を把握し得ない。だが、消費の基本的規定は生産の領域にあるのであり、したがって「欲求の問題は労働力の社会的再生産の問題」なのであり、「だから、生産様式とその運動の理論的分析が必要なのである。」こうした広い視点に立ってこそ、消費や欲求の成立根拠が解明し得るといっているのである。上のマルクスの『経済学批判序説』における生産と消費の関係についての定式からはつぎのように両者の関係が様々の側面から分析される。「①生産様式の再生産は、労働力の再生産を伴うこと。②労働過程としての生産は、労働力の使用 [消耗] を伴うこと。したがって、労働の種類、形態、強度、労働条件が肉体的、神経的、精神的能力の使用形態を規定する。ここから、食料、休息、余暇などの要求 (exigences) [従ってその主観的反映である欲求] が形成される。③生産が、労働力再生産の直接的条件を規定する。a) 搾取率が、賃金水準を規定し、『購買力』を規定する。商品消費に依存する消費に展開される。b) 労働組織が、労働時間と自由時間 (労働力再生産のための) を規定する。④生産が、労働力再生産の社会的条件を規定する。使用価値の生産としての生産は、消費可能な使用価値の範囲とその実際の取得条件を規定する。商品の使用価値と空間、水、日照時間、緑のような『自然的』使用価値を規定する。』⁽⁵⁷⁾つまり、欲求を生産様式の再生産の客観的要求の主観的形態としたうえで、しかもこの生産様式の再生産を矛盾的性格をもつものとして捉えるのである。機能主義的社会学や構造主義的社会学が社会を「『永続的な構造の維持』の原理から説明しようとするが、[それは] せいぜいうまくいったところで再生産の視点を取り上げ、社会的関係の機能を描くのみで、それがどのように生み出される (se produire) かは解明し得ない」。「マルクス主義にとって、再生産の視点は生産様式論の一契約にすぎないし、この意味で再生産とは常に使用価値や社会関係や欲求の生産であると共に変動なのである。」つまり、生産関係の矛盾に基づいた生産様式の矛盾的性格を問題にしているのである。すべての階級社会は生産力を再生産するとともに搾取の社会関係をも再生産しなければならないのであり、「社会的欲求の歴史的な性格を考えると生産関係と生産力の矛盾の統一としての生産様式と階級闘争の文脈に依拠しなければならないのである。』⁽⁵⁸⁾

さらに第三に、「欲求の発展論」に関する彼らの主張を見ておこう。この問題は、欲求を有機体に起こった何らかの欠如 (manque) を埋め合わせる運動とする「欲求の実体論 (le substantialisme de besoin)」を否定する彼らの立場からすれば極めて重要なテーマである。それぞれが何らかの形で論じており、とりわけ体制変革の契機として重視されている。プレトセイユは「欲求はどのように、また何故発展するのか。この問題は理論闘争の中心であり、今日

の欲求についての問題である」とし、ところが「俗流経済学の立場からすると、欲求は普遍的で不変なものときれ、(消費者の『個人的選好』という純粹な心理的多様性に解消される)消費の増大は[欲求]充足の一般的増大であり、豊かな社会、つまり消費社会の到来」とされる。さて、欲求はなぜ発展するのであろうか。「社会的欲求の発展(l'évolution)は各階層の労働力再生産の客観的要求(exigences)の表現である。」そして、この客観的要求の源泉として生産様式とこの様式における生産力の変化、具体的には労働条件と社会条件の変化を挙げる⁽⁶⁰⁾。また、ロランはマルクス『経済学批判序説』の文言「消費は新たな生産への欲求(Bedürfnis)をつくりだすからである。すなわち、生産の前提であるところの、観念的な内的な起動的な原因をつくりだすからである。……欲求がなければ生産はない。ところが、消費は欲求を再生産するのである」(傍点はロラン)を引いて、「だが、消費が欲求を再生産するにしても、消費は欲求を義務的に『もとのままで』再生産するのではない」としている。つまり、欲求自体の発展が問題なのである。その原因は「①生産の進歩が、欲求を多様化することによって消費者をより多くの要求をもつものにする。②教育、文化、社会生活、社会政策の発展(国独资の下では矛盾を含むもの)は消費者の要求水準を高める」ことにあるとする⁽⁶⁰⁾。そこで次に、問題は「新しい欲求」と言われるものの内容である。それは概ね二つにまとめられるかと思う。言わば①「補填的欲求」と②「変革の欲求」である。グルヴェによれば「補填的欲求」とは次のようなものである。欲求の発展は生きた労働の役割と資本主義的生産関係の対立を反映する。資本の永続的努力は、労働力の維持の節約、労働時間のまきあげ、悪化(dégradation)すなわち、労働力の消耗をもたらす。資本の収益性の追及は、無制約な消費、自然資源、[共同消費]設備の費用負担を拒否する。また、無政府の都市化(土地投機と立地)は地域の不均衡と生活枠組の破壊をもたらす。こうして水や空気の汚染、騒音、余暇や休息の破壊がもたらされるのであり、この悪化は「①害悪の源泉に対する反撃と②『補填(compensation)』をカバーする必要性を生み出すのである。」つまり、「科学・技術革命」に伴う生産力の発展による労働条件や社会的な生活条件(とくに都市化)の変化によって追加的、補填的欲求が形成されるのである⁽⁶¹⁾。ロランはこの「補填的欲求」をも含みつつ「われわれの時代の社会的欲求」(その源泉は労働と生産にある)を次のように定式化している。「(1)労働力の補填にむすびついた欲求；休息の欲求を中核にして①労働時間の短縮、労働速度の軽減、②『空間の組織化』と交通の欲求(つまり、職住と娯楽施設の接近)、③自由時間の欲求、④住宅における安楽、静寂、沈黙のミニマムの欲求、(2)労働力の再形成にむすびついた欲求；基本的には食事と健康の欲求、(3)労働力の再生産と『拡大』の欲求；基本的には家族生活と教育の欲求、(4)経済的・政治的生活における増大する社会化の欲求；①情報の欲求、②社会生活への参加の欲求」⁽⁶²⁾。以上の定式を見ると、それは労働条件の悪化に伴う防衛的な「補填的欲求」と共に生産力の発展を条件としたより展開された、攻勢的に位置付けられた基本的欲求をも含み込んだものとなっている。その意味で第二の「変革の欲求」にも連なるある程度普遍性を帯びた欲求と言えよう。だが、その評価は微妙である。現代資本主義は巨大な生産力を元手に一時期「福祉国家」の理念をもって、こうした欲求に答え得るかのような対応を示したのであり、現代資本主義は労働運動や市民運動に対するいやいやながらの譲歩として、商品の消費と公的財政によってこれらの欲求を部分的に充足せざるを得ない面も見落としてはなるまい。資本主義の枠内で生産力を高め得る限りにおいて、階級的・階層的分断を伴いながら、こうした欲求の部分的充足の余地も残されていると言えよう。この点、第二の「変革の欲求」は新しい欲求を資本主義廃棄の欲求としてより直截

に定式化している。テライユは次のように述べる。資本主義的生産の目的は剰余価値の生産であり、無限の資本蓄積は資本の法則なのである。資本は生産それ自体のためではなく利潤のために、生産力を発展させるのであり、人間の生産力の搾取、労働力の価値の低下、労働力の陳腐化(déqualification)、労働強化、労働時間の拡大を伴うのである。こうして、生産者の再生産は矛盾した要求に従わねばならないのである。つまり、生産者は「①剰余価値を生産しながら、②生産力の発展に寄与しなければならない」のである。プロレタリアートは消費領域で労働力を再構成しながら、生産的個人として、また同時に資本の活用の担い手として、自分を再生産するのである。だから、資本はプロレタリアートの発展を妨げながら、生産力を発展させねばならないのである。なぜなら、資本は生産力から生じるプロレタリアートの欲求を充足させることができないからである。「資本はもはや資本自体の再生産ではない生産者の欲求を生み出す。」すなわち、「資本の廃棄」の欲求である。エンゲルスの表現に拠りながら、資本と労働の敵対性とは①[生産と労働の]社会化と②生産力の発展と③利潤のための私的生産の維持、との間の矛盾の表現に外ならない。その真の姿において、階級闘争は資本主義的生産過程の再生産の矛盾的要求の表現なのである」とする⁽⁶³⁾。つまり、テライユは搾取と生産力の発展の矛盾に「新しい欲求」すなわち、「資本の廃棄」の欲求が形成される論理的必然性を見いだそうというのである。だが、言うまでもなくこの生産力の発展から生じる生産者の欲求が「変革の欲求」、「資本の廃棄」の欲求に至る道は、様々な契機を含み込んだものであり、とりわけ主体的契機をも重視した説明がなされねばならない問題なのである。

最後に、まとめて代えて一言しておきたい。とまれ、フランス・マルクス主義は1970年代後半の時点において、生産の視点から欲求や消費の問題にどこまで迫り得るかを示した点で貴重な成果を上げたと言えよう。そのメリットについて言えば、資本主義のもたらした「豊かな消費社会」の到来を謳歌する論調のたえない今日、生産の視点に立つことの意義が存外に大きいことを示している。マルクスの指摘をまつまでもなく、生産と消費は同一の過程の両面なのであり、巨大な生産の背後には巨大な消費、とりわけ「生きた労働」と自然資源の浪費・濫費の世界が繰り返されていることに注目しなければならない。また、われわれは欲求の全体性の視点に立つことによって「豊かな消費社会」の充足し得ている欲求の何と局部的、恣意的であるかを照射し得るのではあるまいか。その意味で、彼らの欲求論は「豊かさ」を相対化する視点を確保し得ていると言えよう。しかし、その理論的枠組の問題点に関して言えば、いわゆる「全般的危機論」の安易な踏襲もさることながら、上に述べた主体的契機の軽視はイデオロギーや文化を再生産する意識の問題を射程に入れ得ない弱点を作り出していると思われる。賃金には算入されることのない「分離された欲求」の充足にとって「意識の獲得」が決定的とされていたことを思い起こすとき、なおさらこの課題は欠くことのできないものである。その際、こうした弱点を克服する上で初期マルクスにおける人間論的視点は何ほどかの貢献をなし得るかと思われる。今後の課題としたい。

注

- (1) 日下公人『さらば！貧乏経済学』(PHP研究所、1986年)。馬場宏二『富裕化と金融資本』(ミネルヴァ書房、1986年)。『日本ゆたかきデータブック』(『世界』臨時増刊、第519号、

- 岩波書店, 1988年)。
- (2) 山崎正和『柔らかな個人主義の誕生』(中央公論社, 1984年)。広瀬嘉夫『民富論—生活大国への処方箋—』(TBSブリタニカ, 1987年)。
 - (3) 馬場宏二『富裕化論のすすめ』(『現代と経済学の対話(2)』所収, 毎日新聞社, 1984年) 37頁。
 - (4) 馬場, 前掲書, 46, 43頁。
 - (5) 高原朝美『富裕化と貧困化の論理』(青木書店, 1987年)。
 - (6) 高原, 前掲書, 16頁。
 - (7) 同, 212頁。
 - (8) 同, 212頁。
 - (9) アダム・スミス『国富論』(大河内一男監訳, 中央公論社, 1988年) 20頁。
 - (10) 相沢与一『『富裕化』と『貧困化』(または労働および生活の疎外)の基礎理論』(『経済』1989年4月号所収) 249頁。
 - (11) 高原, 前掲書, 229頁。
 - (12) 基礎経済科学研究所主催の公開シンポジウム「いま“豊かさ”を考える」において, 角田修一氏は, “豊かさ”概念をめぐって”と題する報告で次のように述べている。「従来のマルクス経済学は, 一見した『豊かさ』と深部の『貧しさ』という分析手法ないしは結論を主張してきました。この必要性はいまも変わらないと思いますが, 同時にいま必要なことは, いわば深部における『豊かさ』の可能性とこれを妨げている『貧しさ』の告発にあると思います。」そして, 「豊かさ」へのアプローチを①人間性, ②関係性, ③物的, ④時間的, ⑤生態系(エコロジー的)の5点にまとめ, その全面的実現を主張している。(『経済科学通信』59号, 1989年4月, 10~11頁)。さらに, 暉峻淑子は近著『豊かさとは何か』において, 「もともと, 生きるとは生命力の全体的な発揮であり, 偏った部分的な人生は豊かな人生とはいえないのである。私たちは食物, 暖かさ, 眠り, 愛し愛されること, 社会からはじき出されないこと, 教育, 信念, 文化的活動, 政治参加などのすべてに対する欲求をもつものとして, 全体に生きるのである。それが自己実現なのである」としている。つまり, 「経済価値」優先の「豊かさ」の一面性を批判し, 「地球的豊かさ感」というエコロジカルな豊かさの復権を提起しているのである。些か論理性, 体系性に欠ける嫌いはあるものの, 欲求の全面性に豊かさの根源を見ようとする点で問題の所在を言い当てていると言えよう。(岩波書店, 1989年, 235, 83頁)。
 - (13) J.P. Terrail, E.Préteceille, M. Decaillot, *Besoins et mode de production, du capitalisme en crise au socialisme*. (Editions sociales, Paris, 1977).
 - (14) P. Grevet, *Besoins populaires et financement public*, (Editions sociales, Paris, 1976).
 - (15) *La Pensée, Besoins et consommation*, No. 180, Avril (Paris, 1975). ちなみに, 収録の論文名だけを記しておく。① J-P テライユ「欲求の生産と生産の欲求」[『欲求と生産様式』に「欲求の歴史的・社会的本質」として再録], ② E.プレトセイユ「社会的欲求と消費の社会化」[『欲求と生産様式』に「社会的欲求と国独資」として再録], ③ J-L. モアイン「欲求の社会的, 個人的規定」④ S. マグリ「社会的欲求と住宅政策」⑤ P. グルヴェ「欲求の主観的契機と客観的契機」⑥ P-H.C. ローヴ「欲求対利害。その二重の必然性」⑦ F. ゴダール「社会的階級と消費の形態」⑧ J-P. テライユ「欲求, 消費と生産関係の隠蔽」[『欲求と生産様式』に「商品の物神化と欲求の観念論」として再録]。 *Économie et politique, pouvoir d'achat/niveau de vie/besoins*, No. 153-4-5. (Paris, 1967). 同じく, 論文名だけを

記しておく。① S. ロラン「欲求と民主的展望」② H. ノロー「『購買力』概念とその限界」
③ 同、「欲求概念の考察」④ C.L. トゥロン「欲求の経済理論」。

- (16) J.P. Terail, et al., *op. cit.*, p. 8.
- (17) *Ibid.*, p. 9.
- (18) *Ibid.*
- (19) *La Pensée, op. cit.*, p. 4.
- (20) *LE CAPITALISME MONOPOLE D'ÉTAT-Traité Marxiste d'Economie Politique-*,
2tomes, Editions Sociales, Paris, 1971.邦訳, 大島雄一他訳『国家独占資本主義(上, 下)』
(新本出版社, 1975年)。
- (21) 前掲書, 邦訳, (下) 349頁。
- (22) 同, (上) 8頁。
- (23) 同, (下) 352頁。
- (24) 同, (下) 354頁。
- (25) 同, (上) 2頁。
- (26) J. P. Terrail, et al., *op.cit.*, p. 17.
- (27) *Ibid.*, p. 18.
- (28) *Ibid.*
- (29) *Ibid.*, p. 20.
- (30) *Ibid.* この点テライユは『パンセ』の論文「欲求の生産と生産の欲求」において同様の主張をしている。「社会学者の誤りは、生産を欲求充足の単なる手段として欲求に対置させていることである。生産の手段化は必然的に生産を形成しまさに『一定の経済的, 社会的時代』を特徴づける社会関係を蔽い隠すことになる。」(*La Pensée, op.cit.*, p. 6)
- (31) *Ibid.*, p. 37.
- (32) *Ibid.*, p. 40.
- (33) *Ibid.*, p. 41.
- (34) *Ibid.*, p. 42.
- (35) *Ibid.*, p. 43.
- (36) *Ibid.*, p. 43-44.
- (37) *Ibid.*, p. 45.
- (38) *Ibid.*, p. 46. これは, P. Bourdieu, “Condition de classe et position de classe”, *Archives européennes de sociologie*, no 2, 1966, p. 201からの引用である。
- (39) *Ibid.*
- (40) *Ibid.*, p. 47-48.
- (41) *Ibid.*, p. 49.
- (42) *Ibid.*
- (43) *Ibid.*, p. 54.
- (44) *Ibid.*, p. 56-57.
- (45) *Ibid.*, p. 59.
- (46) *Ibid.*
- (47) *Ibid.*, p. 60.
- (48) *Ibid.*, p. 68.
- (49) Edmond Préteceille, “Besoins sociaux et socialisation de la consommation”, *La*

Pensée, op.cit., p. 107.

- (50) J.P. Terrail, et al., *op.cit.*, p. 177.
- (51) Jean-Pierre Terrail, "Production des besoins et de la production", *La Pensée, op.cit.*, p. 8.
- (52) P. Grevet, *op.cit.*, p. 48.
- (53) *Ibid.*, p. 50.
- (54) H. Nolleau, "Reflexion de la notion de besoins", *Économie et politique, pouvoir d'achat/niveau de vie/besoins*, No. 153-4-5. (Paris, 1967). p. 126.
- (55) E. Prêteceille, *La Pensée, op. cit.*, p. 28.
- (56) J.P. Terrail, et al., *op.cit.*, p. 73.
- (57) E. Prêteceille, *La Pensée, op.cit.*, p. 22-23.
- (58) J.P. Terrail, et al., *La Pensée, op.cit.*, p. 35.
- (60) S. Laurent, "Besoins et perspectives démocratiques", *Économie et politique, op.cit.*, p. 26.
- (61) Patrice Grevet, "Le moment objectif et le moment subjectif des besoins", *La Pensée, op.cit.*, p. 110.
- (62) S. Laurent, *Économie et politique, op.cit.*, p. 26-30.
- (63) J.P. Terrail, et al., *op.cit.*, p. 92-9.

La théorie marxiste française du besoin

Takashi YASUDA

RÉSUMÉ

Pour critiquer les discussions de la société de consommation abondante, il est indispensable au marxisme d'établir la théorie du besoin. Il me semble que c'est sa théorie qui permet d'établir le point de vue pour critiquer relativement les diverses discussions de "abondances". Ce problème me mène à la théorie marxiste française dans la seconde moitié des années 1970 sur les besoins. Ils pensent que le capitalisme moderne se caractérise par la crise du C.M.E. et que les besoins populaires sont tombés insatisfaites. A propos de combat idéologique sur le besoin, ils disent que, d'une part, sa théorie bourgeoise disjoint la production et la consommation et met l'accent premier sur la dernière, ce qui fait la production de la moyen et produit "le sujet abstrait" qui a pouvoir de choisir librement des marchandises et, d'autre part, les différentialistes font des consommations de moyen expressive du différentialisation et complètent la figure de "la société de consommation."

Sa théorie du besoins définit le besoin comme "forme subjective des pratiques sociales structurant la reproduction de la force de travail" et analyse en détail les besoins nouveaux comme le besoin de "la compensation" et de "la abolition du capital".

Je voudrais évaluer sa théorie du besoin pour la raison qu'il le comprend au point de vue de la double totalité. Mais, il est insuffisant pour le analyser par les moments subjectives.